

ピッチを離れた選手たちの横顔の一端を、職場の仲間の声も交えながら紹介する「ふだん着の織姫たち」シリーズ。今回は、高さスピード、体の強さを生かして活躍するDF 坂井優紀選手(背番号 5)です。

さかい ゆき
坂井 優紀 選手 (26歳)

=(株)パスコ東北事業部勤務=

●だんだん分かってきました●

仙台駅東口に程近いビルのオフィスで、パソコンに向かい、デスクワークに励む。道路の「網図」を見て路線を入力したり、年度ごとに変わる道路の幅や長さといったデータが集まった調書を納品物として作成したり。専門的な知識が求められる業務に「初めてのころは全体像がつかみきれなかったんですが、だんだん『あれを作るために、今これをやってるんだ』とか『このための準備なんだな』と分かるようになりました」と、はにかむ。「けっこう人見知り」と話すが、周りからは「いえいえ。お客様からの電話にもパッと対応してくれますよ」。

本社(東京)で発行する社内広報誌で2カ月に一度、裏表紙一面をベガルタ仙台レディースのページに充てるなど、社全体でバックアップされている。そんな勤務先に「ホームゲームには必ず来てくださる方がいますし、横断幕も会社で作っていただいています」と、あらためて感謝する。

千葉で生まれ、小5で兵庫へ。「寒い」が第一印象だった仙台での生活も4年目に入った。「だんだん慣れて、住みやすくなりました。海鮮なんかおいしい」と目を細める。オフはサッカーから離れ、安本紗和子選手らと車であちこち出掛けることが多い。「亘理にはらこ飯を食べに行ったり、山形の温泉に行ったり」

料理は「いつも似たような、チャチャッと作れるものになっちゃいます」と話すものの、そこはスポーツマン。疲労回復のため野菜をいっぱい摂るよう心掛ける。夏はTシャツに短パン、冬はジーンズといったラフな感じが好き。「私服でスカートは一着も持ってません。最近は細身のジーンズに挑戦しています。前はダボツとしたものだったけど、いい年齢なので」と笑う。

会社を挙げてのサポートに感謝

●応援チャントがお気に入り●

小学校の入学式で配られていたクラブチームのピラを見て、母親にねだり、男の子に一人交じってサッカーを始めた。以来20年。これ以外のスポーツをしている自分を「想像できない」。前所属チームを戦力外となった時、「このままやめるのは悔しい。新しい所でチャレンジしよう」と、発足したばかりのベガルタのセレクションを受けて入団。その後、ケガで戦列を離れた時期もあったが、今や高さを誇る不動の右サイドバックとしてチームを牽引する。



そんな頑張り屋にサポーターから送られるのが「♪サ〜カイ、サカイ、やってやれ!!」の応援チャント。「初めて聞いた時は『えっ、スゲ〜』と驚いたけれど、みんなが『優紀っばいね』と言ってくれて、今ではお気に入り。大好きです」。負けた時でも「次、次っ」「下向くな!」と支えてくれる人たちに応えるべく、今日もピッチで体を張る。

ターから送られるのが「♪サ〜カイ、サカイ、やってやれ!!」の応援チャント。「初めて聞いた時は『えっ、スゲ〜』と驚いたけれど、みんなが『優紀っばいね』と言ってくれて、今ではお気に入り。大好きです」。負けた時でも「次、次っ」「下向くな!」と支えてくれる人たちに応えるべく、今日もピッチで体を張る。

<応援しています!!>

●なでしこジャパンに入って●

年が一番近いということで、ずっと仕事を教えてきました。サッカーに対する姿勢と同じだと思いますが、とにかく真面目。必ずメモを取り、「一」を言えば「九」から「十」やってくれます。この3年で随分成長し、今や、なくてはならない存在。普段一緒にいる者からプレッシャーをかけられるのも嫌かなと、私はあまりサッカーの話はしないようにしているんですが、活躍して、ぜひまた日本代表に入ってもらいたいですね。

(職場の先輩の鈴木英文さん)

文:K. Tsuge 写真:K. Honma

ベガルタ仙台レディース後援会通信

The Support Association of VEGALTA SENDAI LADIES

ベガルタ仙台レディース後援会【2015年度第2号(通算12号)】

「後援会オリジナルエコバッグ」をお配りしました

4月5日、小雨の中、いよいよホームでの戦いが始まりました。後援会ではホーム開幕戦を盛り上げようと、記念の「オリジナルエコバッグ」を1,000個用意して、ユアスタに来場した皆さんにお配りしました。

このオリジナルエコバッグは、仙台市若林区在住の生活デザイナー、佐藤和子さんのデザインによるものです。カラーはレディースのイメージに合ったシグナルレッドを選びました。コンパクトで、とてもかわいいバッグです。お弁当を入れたり、おやつを入れたり、使い方はさまざま。試合観戦の時はもちろん、普段の生活でもぜひご活用ください。



なお、試合開始15分前までに来場し、先着1,000人に漏れた方には、「エコバッグ引換券」をお渡ししました。きょうのホームゲームをはじめ、今後の第7節(5月6日・角田市陸上競技場)、第9節(5月17日・仙台市陸上競技場)の際、お引き換えいたします。後援会ではホーム開幕戦で毎年、記念品をお配りしており、今回のオリジナルエコバッグは、2013年度のなでしこの種、14年度のビッグフラッグ仕様ハンカチに続く第3弾です。

後援会会員の皆様へ/記念オリジナルバッジのお知らせ

後援会では、会員更新をされた会員の皆さんと新会員の方々に2015年度バージョンの「記念オリジナルバッジ」をお渡ししています。まだお受け取りになっていない会員の皆さんは、ホームゲームの際、後援会ブースにお声掛けください。



5月6日は角田でホームゲームです

スペランツァFC大阪高槻を迎えての第7節は、5月6日(水曜・祝日)の正午、宮城県角田市の市陸上競技場でキックオフされます。

後援会では、10時30分から11時45分まで、ブースを開設していますので、お立ち寄りください。

当日のブースでは、次のような活動を行います。

- 1、ホーム開幕戦記念オリジナルエコバッグの引き換え。4月5日の新潟L戦(ユアスタ)でお配りした「引換券」をお持ちの方が対象です。
- 2、後援会への入会手続き。「記念オリジナルバッジ」もお渡しします。
- 3、後援会会員の年度更新手続き。2と同じバッジもお渡しします。
- 4、VL☆PRESS第4号と後援会通信第2号の配布。

石巻後援会のご紹介

ベガルタ仙台レディース石巻後援会（事務局・三陸河北新報社事業部）は、ベガルタ仙台レディース（仙台L）がまだチャレンジリーグに参戦していた2012年8月26日、仙台Lを応援し、世界に誇れるクラブチームになるよう活動を支援するとともに、石巻地区のスポーツ振興・発展と活気ある地域づくりに寄与することを目的に、宮城県内で最初に設立された後援会です。

石巻ではチャレンジリーグ時代から毎年、石巻市総合運動公園フットボール場を会場に試合が開催されています。4年目の今年も4月19日（日）に第4節・ASエルフェン埼玉戦が行われ、石巻後援会の会員や、会場に隣接する仮設住宅の方々、石巻地区のサッカーファンなどが来場して仙台Lを応援。3-0の見事な勝利に歓声を上げるとともに、選手の華麗で果敢なプレーにたくさんの元気をいただきました。

試合前日の18日には、地元企業の協賛により、石巻かほく紙上にカラー2ページ見開きの「ベガルタ仙台レディース特集」を掲載。さらに、石巻地区の150名を試合に招待することができました。また、昨年に続いて今年も、ホームゲームへの応援バスツアーを計画中です。

石巻後援会の会員数は、まだまだ少ないのが現状で、会員を増やすことが今後の課題です。チームを率いる千葉泰伸監督は石巻出身。いつの日か、石巻地区出身のなでしこジャパン代表が現れることを願いながら、仙台Lを石巻地区から応援していきたいと思えます。

石巻後援会へのご入会申し込み、お問い合わせは、土、日、祝日を除き、三陸河北新報社内の事務局 0225（96）0321 へお願いします。

ベガルタ仙台レディース後援会入会のご案内

私たちベガルタ仙台レディース後援会は、ベガルタ仙台レディースを応援し、さまざまな支援活動を通してスポーツ文化振興及び地域、社会の発展に寄与することを目的として設立いたしました。

ベガルタ仙台レディース後援会は会員一人ひとりがつくりあげる組織です。宮城を元気にしてくれるチームの活躍に感謝し、ともに応援しましょう。あなたの入会をお待ちしています。

ホームゲーム会場の後援会ブースで受付をしています。

○入会金 3,000 円（初回のみ） ○年会費 1口 2,000 円（何口でも）

○入会特典 後援会オリジナルTシャツ、後援会オリジナルバッジ

★入会時は入会金と年会費を合わせた金額をお支払いください。（更新時は年会費のみ）

★2015年度会期は2016年1月31日までです。

★入会時に会員証をお渡しいたします。

～寄稿～ 3度目の正直

後援会顧問 中島信博（東北大学名誉教授）

ベガルタ仙台レディースが正式に発足したのは、2012年の2月だったから、4年目となった。もともとは1997年に、宮城県三本木で「YKK東北女子サッカー部フラッパーズ」として創部されたのだが、8年後の2005年に「東京電力女子サッカー部マリーゼ」へと移管され、7年間は福島Jビレッジにいたという歴史を持っている。

後援会に入れていただいてから、私はこうした誕生からの経緯を知ることになった。なにはともあれ、廃部を逃れて、東北の一角で存続したことを慶ぶとともに、再び「右往左往」させてはならない、翻弄するようなことがあってはならない、そんな気持ちを強くするにいたった。

最初は宮城国体のポイントゲッター役を期待して、宮城県が県内企業に創部を依頼したものであった。それが社会経済情勢の変化のなかで、別企業へと移管され、原発の事故後に、再び宮城に戻ってきた、というような波瀾の道を進ってきたのだ。

「フラッパーズ」から「マリーゼ」へ、そして「レディース」へという名前の変化を知って、私には、「三度目の正直」という言葉が浮かんできた。二度あることは三度あると言うが、存続の危機はもうあって欲しくない。

女性のサッカーが根付くところとして、仙台・宮城・東北が尊敬の目で見られるような地域になって欲しい。そのためには、地域の住民が知恵を絞らねばならないと思う。行政や企業を悪しざまに言うつもりは毛頭ないし、これからも果たしていただきたい役割は大きい。しかし、社会情勢の変化で、行政や企業の事情は変転する。どのような変化に直面しても続いていけるように、行政や企業にお任せでなく、住民もできるところで参加していこうではないか。そのためにはどうすればいいか、意見を出し合おうではないか。

（2015年度後援会総会で顧問に就任された中島信博さんの寄稿文を連載します。）

後援会ブーススタッフ紹介その2 山崎沙緒里さん

ホームゲームの後援会ブースで活動するボランティアスタッフの方を紹介します

山崎沙緒里さん、結婚を機に、25歳まで住んだ塩釜市から神奈川県川崎市に移住しました。地元から離れても、ご夫妻そろってベガルタ仙台を熱く応援しています。トップ、レディースとも、ホームの試合だけでなく、アウェーの地にも多く応援に行っています。

山崎さんご夫妻がレディースを応援するきっかけとなったのは、休部中だったマリーゼの受け皿がベガルタ仙台レディースになると発表された直後に、千葉で行われていた合宿で、一生懸命ひたむきに練習している選手達の姿を目の当たりにしたからです。以前、ご自宅付近の等々力陸上競技場でマリーゼの試合を観戦したこともあり、「希望の光」をスローガンに掲げるベガルタ仙台にレディースチームができたのは運命だと思ったそうです。

「地元ではない我々夫婦にも何か力になれることはないか」、そう考えていたところに知人からブーススタッフへの誘いを受け快諾。移動距離や時間の制限があるなか、「自分たちにできる範囲のことをやろう」と、ブースでの後援会活動に参加する山崎沙緒里さんのすがすがしい笑顔がステキです。